Q3－1　初期段階の日本語指導では、どのようなことが大切ですか。

A　帰国・外国人児童生徒の日本語能力に応じた初期指導を行うことが大切です。
※具体的な取組例については、「外国人児童生徒等の日本語能力に応じた初期指導マニュアル」（令和３年３月　北海道教育庁学校教育局義務教育課）を参考としてください。

児童生徒の実態を多角的に把握しましょう。

・生活や学習の状況、適応状況をはじめ、文部科学省が作成した「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」（以下、DLA）などにより、「言葉の力」を把握するなど、当該児童生徒の実態を多角的に把握します。

日本語指導のコースを設計しましょう。

・DLA などにより把握した「言葉の力」を基に、「サバイバル日本語」や「日本語基礎」、「JSL カリキュラム」などの日本語指導のプログラムを効果的に組み合わせたコース設計をします。

ICT を効果的に活用しましょう。

・多言語翻訳システムやICT教材などを効果的に活用するなど、児童生徒の実態に応じた日本語指導に取り組みます。

○　なお、幼稚園等では、外国人幼児に受容的な態度で臨み、そのことを幼児自身が感じ取れるようにするとともに、自然に日本語に親しむことができるように配慮することが大切です。

ICT を活用した日本語指導

○　多言語翻訳システムや、音声読み上げ・漢字へのルビ振り等の機能をもつ ICT 教材、日本語や教科の学習のために配慮や工夫がなされたデジタル教材・コンテンツ、テレビ会議システム等を活用した遠隔授業の実施など、ICT を様々に活用し、外国人児童生徒等に対する教育の充実を図ることが大切です。

○　外国人児童生徒等だけでなくその保護者に対しても、多言語翻訳システムを活用したコミュニケーションや、母語支援員等による遠隔での説明・相談など、支援の仕方を工夫することも考えられます。

Q3－2　まずはじめに、どのような日本語指導が必要ですか。

A　日本語の指導に当たっては、「来日直後」「日常会話ができるまで」「在籍学級の授業に参加できるまで」などの段階を設けて、学習内容を決定することが考えられます。

特に、来日直後の帰国・外国人児童生徒に対して、日本の学校生活や社会生活について必要な知識を得て、行動する力を付けることを目的とした「サバイバル日本語」プログラムを活用するとよいでしょう。

サバイバル日本語プログラム（「外国人児童生徒受入れの手引き」P27 参照）

(1) 学習内容

ここでは、次の４つの観点から日本語使用場面と教える日本語の語彙・表現を決定します。その児童生徒にとって緊急性の高いものから、順に教えましょう。

【観点別表現例】

観点	使用する表現例
健康で衛生的な生活を送るために	**トイレ**「先生、トイレいいですか」 **給食**　「これいらない、アレルギー」 **体調**　「お腹／頭　いたいです」 **衛生**　「ハンカチ、あります」
安全な生活を送るために	**交通安全** 「赤はとまれ、緑は進め」　「車、気をつけて」 「あぶない、だめ」　「助けて！」
周囲の仲間との関係をつくるために	**あいさつ** 「おはよう、さようなら」　「ありがとう」「ごめん」 **休み時間**　**物の貸し借り** 「ぼくも入れて」　「これ、かして」
学校の生活を円滑におくるために	**教科名**　「次、何の勉強？」「国語／算数／社会／理科　他」 **教室**　「先生、どこ？」「体育館／グラウンド／職員室　他」 **清掃**　「掃除／ぞうきん／ほうき」 **遠足**　「持ち物、しおり、すいとう、お弁当　など」

(2) 指導方法

実際の場面を示し、そこで使用する日本語の語彙や表現を聞かせ、それをそのまま繰り返して言う練習をします。

次に、応用できる場面を提示し、その表現を使う練習をします。文法の説明などは、基本的には行う必要はありません。表現も、その時の児童生徒の日本語の習得状況に応じて、例えば、「トイレ」「トイレ、いい。」「トイレ、いってもいい。」「トイレにいってもいいですか。」などから、選択します。

聞いて理解できるようになることが目的であれば、発話を求めず、「表情やジェスチャーで反応できればよい」という目標を設定してもよいでしょう。

【道内の実践】

イラストを活用した意思の疎通

言葉による意思の疎通が難しい時、イラストを使ってコミュニケーションを図っています。

例えば、「うれしい」、「いやだ」、「トイレ」などがわかるイラストの小さなカードを用意して、今の気持ちを表現させ、まわりの先生や子どもが日本語で教えています。

コラム

二つの「日本語」と二つの「言語能力」

北海道教育大学　阿部二郎

日本語指導に当たっては、子どもの二つの言語能力に留意する必要があります。それは「生活言語能力（BICS）」と「学習言語能力（CALP）」です。

「生活言語能力」は授業以外の場面での日常的なコミュニケーションに必要な日本語の力です。日常生活で使う日本語にはその場の状況や身振り手振りなどヒントになることが多く、「生活言語能力」は教員やクラスメートが日常のコミュニケーションを積極的に重ねることによって、早ければ数か月で、ある程度は自然に身に付いていきます。

「学習言語能力」は授業や試験などの場面で必要となる日本語の力です。こちらは抽象的・論理的な思考を伴い、自然に身に付けることが難しく、また、身に付くまで何年も要する場合があります。教員は、「生活の日本語」と「学習の日本語」が別の言語であり、子どもが二つの日本語を学ばなければならないということを意識することが大切です（たとえば、「とる」は日常的には「棚から本をとる」のように使いますが、「線分 AB の中点 M をとる」の場合は「とる」の意味が全く違います）。

「日本語がだいぶ話せるようになっているのに、授業ではほとんど発言しない。試験の成績が極端に悪い。」といった場合は「生活言語能力」が身に付いている一方で「学習言語能力」が身に付いていない可能性があります。そのような場合、教材や問題の日本語を書き直し（リライト）することで大きく理解の助けになることがあります。具体的には、漢字にルビを振る、分かち書きをする、長い文を複数の単文に分割する、教科特有の言葉づかいを子どもたちが日常使うものに近づけるといったことをします。

算数の教科書のリライト例*	
（原文）	１ℓを 10 等分した３こ分の大きさは、0.1ℓの３こ分で、0.3ℓ です。
（リライト）	１ℓを　10 こに　分(わ)けます。　３こ分(ぶん)は　0.3ℓ　です。

（*『愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム平成 18・19 年度活動報告書』２より引用）

Q3－3　サバイバル日本語の次にどのような指導が必要ですか。

A　日本語の習得状況を踏まえ、学ぶ意欲や日本語を覚えることの意義を実感させながら、段階的な指導を工夫しましょう。

＊サバイバル日本語：日本の学校生活や社会生活について必要な知識、そこで日本語を使って行動する力を付けることを目的としたプログラム。挨拶の言葉や具体的な場面で使う日本語表現を学習することが主な活動（P. 14 Q3-2 参照）

段階的に指導しましょう。

・「ひらがな」を覚えると日本語習得がスムーズになります。個別指導が効果的です。
・算数科においては、九九を覚えると、その後の学習が意欲的になる傾向があります。出身国と計算方法（わり算など）が異なる場合があるので注意します。
・教科においては、漢字が課題です。教科書にふりがなを付けるとともに、その単元に出てくる漢字の読み書きを練習する活動を入れることが効果的です。
・個別に説明するときは、簡単な日本語で、ゆっくり、はっきり話します。

学習意欲を高めましょう。

・実生活ですぐに使える日本語から学習し、日本語を覚えてよかったという実感をもたせることが大切です。
・学習記録などを蓄積して、児童生徒が自分で学びの進歩を実感できるようにします。

安心して学ぶことのできる学習環境を整えましょう。

・よいところはみんなの前でほめ、注意するときは個別指導をします。
・教室での座席は、最初のうちは学級担任の近くにします。
・学級のみんなで、身近なものにひらがなで書いたカードを貼ります。
・休み時間など学校生活をケアしてくれるよう学級の児童生徒にお願いします。ただし、一人の児童生徒に固定化しない工夫が必要です。

成人の学習者と異なり、児童生徒の場合は、日本語学習に目的意識を持てない場合が多く、学習内容が定着しないことがよくあります。
そのような場合、同じ学習内容に留まって暗記を強要したりせず、次の学習に進みましょう。新たな内容と関連付けて学ばせる、あるいは、しばらくしてから児童生徒の生活や学習状況に関連付けて再び取り上げてみるといった工夫をしてみましょう。
言語習得のプロセスは、スパイラルに進むと言われています。児童生徒の興味関心や必要性を考慮し、日本語でコミュニケーションすることの楽しさや、意味が感じられる学習活動の中で、繰り返し指導することが重要です。

Q3－4　日本語基礎とはどのようなプログラムですか。

A　「日本語基礎」は、文字や文型など、日本語の基礎的な知識や技能を習得するためのプログラムです。日々の生活で日常的に用いられている日本語について、整理し、規則を学び、自分でも使えるようにするための学習ができるような内容となっています。

学校への適応や教科学習に参加するための基礎的な力を身に付けましょう。

・日本語の知識・技能の獲得を目的の中心としつつ、学校への適応や教科学習に参加するための基礎的な力として日本語の力を位置付けて計画します。
・基本的に、（A）発音の指導、（B）文字・表記の指導、（C）語彙の指導、（D）文型の指導の４つがあります。

（A） **発音の指導**	文字や語彙の指導、文の音読と一緒に指導します。文字と対応させて五十音の発音を練習することも大切ですが、それだけではなく、意味のある語の中の音として認識させて練習させます。
（B） **文字・表記の指導**	基本的には、「ひらがな」→「カタカナ」→「漢字」の順番に指導します。ひらがなの指導については、発音の指導と並行して行うことになります。ひらがなの学習が終了する頃から、教科学習や行事などとの関連を考え、児童生徒の使用頻度が高いカタカナ語彙や漢字語彙については、適宜導入します。
（C） **語彙の指導**	児童生徒の生活場面に関連のある語彙のグループをつくって、学習させます。初期の段階では、「サバイバル日本語」の学習と関連付けて行うと効果的です。実物や写真、絵やカードなど視覚的教材を利用して、意味を理解させます。
（D） **文型の指導**	取り出し指導では、文型を示し、それを利用して文を理解したり、文をつくって話したり書いたりできるような力を育むことが必要です。

〔文型の指導例〕　「～に～があります（存在文）」

【小学校前半（１～３年生）】

①導入

教室にある物（机、いす、黒板、時計）について、場所と物の語彙を確認する。物がある場所を指示しながら、口頭で「壁に時計があります。」と文型を導入する。

②練習

・導入した文型を、実物や絵で意味を確認しながら繰り返し発話する。
・机、いす、黒板、時計などのカードを裏返しておいて、何があるのかを当てるクイズを行う。

③まとめ

最後のクイズの内容を「～に～があります」という文型を利用して書き（２～３文）、その後、作った文を読む。

Q3－5　技能別日本語とはどのようなプログラムですか。

A　「聞く」「話す」「読む」「書く」の日本語の４つの技能のうち、いずれか１つに焦点を絞った学習で、小学校高学年以上、特に中学生には有効なプログラムです。

目的に応じて、１つの技能に焦点を絞った指導を行いましょう。

・４つの技能の学習内容
①「聞く」活動（リスニング練習、本の「読み聞かせ」など）
②「話す」活動（ディベート、ディスカッションなど）
③「読む」活動（長文読解など）
④「書く」活動（作文など）

◆文部科学省のWebページには、各技能の日本語の指導項目について段階別（初期指導の前期、後期及び教科につながる学習段階）に掲載されています（「個別の指導計画」のための学習目標項目例）ので参考にしてください。
・文部科学省「学習目標例」
https://www.mext.go.jp/content/1422838_03.pdf

〔「読む」活動の指導例〕「リライト教材の活用」
（豊橋市教育委員会「外国人児童生徒教育の手引き」P60 参照）

・「読む」活動には、リライト教材（初期の段階から教科の学習に入りやすくするために、教科書本文を子どもの日本語能力に対応させて書き換えた教材）を活用して指導する方法があります。
・リライト教材の使用は、ひらがなの読み書きがほぼできるようになった時期から開始すると効果的であり、特に、国語の教材を活用したリライト教材は、子どもたちに学年相当の思考を促すことができます。
・リライト教材を作成する際には、子どもの発達の段階に応じて、複文を短文にする、使用する言葉を選ぶなど、できるだけやさしい日本語にしつつ、内容は学年相当になるよう留意することが大切です。

〔「書く」活動の指導例〕「短文作文」
（文部科学省「外国人児童生徒等教育に関する動画コンテンツ『日本語指導の方法２』」参照）

【小学校前半（１～３年生）】
学習項目「おもちゃの作り方」を説明する（作文）

①　おもちゃを作って遊ぶ
・材料や道具のイラストカードを用いて、語彙を繰り返し聞かせ、問いかけて理解させる。
・作っている様子の写真を撮りながら、おもちゃを作る。
・作ったおもちゃで工夫しながら楽しく遊ぶ。
・子どもとやりとりしながら、遊び方についての表現を繰り返し聞かせ、問いかけて理解させる。

②　おもちゃの作り方を作文する
・おもちゃを作った経験について教師が質問し、語彙や表記について確認する。
・おもちゃを作ったときに撮った写真を作業の順番に並べかえる。
・並べた写真がつながるように、接続表現（「それから」「まず」「さいごに」「つぎに」などのつなぎ言葉）を選択させる。
・語彙や助詞が書かれたカードを活用し、口頭で作文する。
・原稿用紙に書く。
※書字力によって、接続表現を選択させた後に短冊に文を書かせる方法もあります。
※作文指導では、まず文章にする内容を構成し、日本語で表現することを重視します。書字力や原稿用紙の使い方などについては、必要に応じて50音表や漢字リストを確認させながら書かせたり、別途練習する時間を設定したりします。

Q3－6　JSL カリキュラムとはどのようなプログラムですか。

A　「JSL カリキュラム」は、教科と日本語を結び付けて指導するプログラムです。日本語を学ぶことと教科を学ぶ力を身に付けることが一つのカリキュラムとして構成されています。

教科等の内容と日本語の表現とを組み合わせて授業で学ばせましょう。

・「JSL カリキュラム」は、目標が言語面と内容面の２つの面からなっています。

※例えば、算数の割り算について理解し、割り算ができるようになるという算数の目標があったとすれば、その学習において必要とされる日本語の力が日本語の目標となります。この場合、「割り算の計算の仕方を日本語で表現できる」という目標になります。この日本語の目標は、児童生徒の日本語の力によって変えなければなりません。授業の設計においては、学習内容が優先して決定され、対象の外国人児童生徒がその学習に参加するためには、どのような日本語の語彙や表現・文型が必要かを後で決定します。

＜JSL カリキュラムの４つの特徴＞

①児童生徒一人一人の実態に応じた個別のカリキュラムの作成を前提とする。
②日本語を教科学習の場面から切り離さずに学習する場面をつくる。
③具体物や直接体験により学びを支える。
④対象児童生徒の学習参加を支援するために日本語表現を調整し、明確化する。その表現は固定化したものではなく対象児童生徒の実態に応じて決定する。

指導例（抜粋）「形（長方形と正方形）」

〔活動を通して学ぶ言語表現〕
・分類して考える「～と～が仲間です」
・命名する「これを～といいます」
・知識を確認する「～は何だと思いますか」　など

①導入、学習課題をつかむ
三角形、四角形、長方形、正方形、直角三角形を仲間分けする。まず、自由に分け、次に２つのグループに分ける。
「どれとどれが仲間ですか」「～だと思います」

②２つのグループの特徴を調べる
どこに着目するかを考える。
「辺」「頂点」という言葉を知り、辺や頂点の数で弁別した仲間を表す。
「これを『辺』『頂点』といいます」

◆文部科学省のWebページには、JSLカリキュラムに関する資料が掲載されていますので、参考としてください。
・文部科学省「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について（最終報告）」小学校編
・文部科学省「学校教育におけるJSLカリキュラム中学校編」

Q3－7　学習評価をどのように行うとよいですか。

A　学習評価については、目標に準拠した評価を行うことが基本です。しかし、日本の学校に編入学してきたばかりで初期の日本語を習得している段階の帰国･外国人児童生徒にとって、学習するための言語を理解しなければならない教科等を学ぶことはとても難しいものです。

参照：Ｑ３－２コラム

そのため、公正な評価を行うとともに、本人の努力を認める評価の工夫を行うことが重要です。

日本語能力の状況に応じて対応しましょう。

・通知票に関しては文章表記を中心に、評価できる教科のみについて記述する。
・日本語指導の記録を作成して通知票と一緒に渡す。
・教科によっては児童生徒が主に使用する言語での解答を認め、それを評価する。
・中学生では、定期試験などでルビを振ったり、個別で通訳を配置したりする。

高等学校入試への対応について共通理解を図りましょう。

・学校長が評価・評定の考え方を明確にして全教職員で共通理解を図り、指導要録や公立高等学校提出用の成績一覧表、個人調査票などへの記載内容について検討する。

対象児童生徒及び保護者に、日本の進学や入試の制度について説明しましょう。

・評価とともに高等学校入試の制度についても丁寧に説明する。

中学１年生からでも、入試制度や入試条件を保護者に理解してもらうことが重要です。国によっては、進級できない制度として位置付けられ、運用されているケースもあり、保護者の多くは日本の教育制度についての理解が不十分です。きちんと説明をしないと、中学３年生になって保護者から「この成績なら、どうして３年生に進級させたのか」などという質問を受けることもあります。

Q3－８　帰国・外国人児童生徒のよさを生かした国際理解教育を進めるには、どのような点に配慮すればよいですか。

A　帰国・外国人児童生徒が生活していた国の自然や文化、歴史などに触れる機会を積極的に設けるなど、自己のよさに気付き、他の児童生徒が国際的な視点で考えることができるような配慮をすることが必要です。

教科、道徳、総合的な学習の時間を活用した取組

・世界の国々の様々な挨拶やジェスチャーについて知り、国によって挨拶の仕方やジェスチャーの表す意味に共通点や相違点があることについて理解を深める。
・世界の国々の衣食住について、トピック毎に日本と外国の共通点や相違点について考え、自国及び他国の文化を理解する。

特別活動、学校・学年行事を活用した取組

・日本と世界の国々の伝統的な遊びを集会等で実際に体験することで、世界には様々な遊びがあることや、遊びとなっている内容も国により多様であることを理解する。
・世界の国々の料理や料理に関わる気候風土等について知り、実際に調理し味わうことをとおして、自国及び他国の文化について理解を深める。

コラム　**「国の紹介」の留意事項**

北海道教育大学　阿部二郎

自国文化や遊びの紹介はよく行われる取組の一つですが、注意も必要です。日本人は着物を着て毎日寿司を食べるわけではありませんし、現代の小学生はお正月に羽根突きやコマ回しをすることは少ないでしょう。一方で、外国からの児童生徒も日本の子どもと同じように携帯ゲームで育ち、自国の伝統的な遊びはしたことがないかもしれません。料理についても、どの国の子どもも、日ごろ家庭では保護者が作ってくれる特に名前もついていないような料理を何となく食べているのではないでしょうか。自国文化紹介はそうした点に注意して行わないと、どちらの子どもにも実感の伴わない「文化ステレオタイプ」紹介になってしまいがちです。

こうしたことを避けるために、たとえば七夕や節分など、子どもたちに実体験があるような季節行事を共に体験する（あるいは外国からの子どもの出身国で現代も行われている行事を一緒にしてみる）といった内容にするのは一つの方法です。

料理であれば、その国の代表的な料理の紹介にとどまるのではなく、毎日食べるものの中から自分の好きな料理を説明しあうような活動が考えられます。

また、伝統文化や「国」にこだわらず、「自分の一週間の生活紹介」や「趣味や特技の話」などをするのも有効です。「違うところ」から入るのではなく、素直に毎日のふつうの生活を紹介しあう中で、「同じところ」の中に「違うところ」を見つけることから、異文化理解が進んでいくこともあります。

もちろん、伝統文化紹介などをすべきではないということではありませんし、伝統文化紹介をきっかけに自文化を見つめなおすという意義はあります、大切なのは、教員自身がその取組で何を目指すのかを意識化することです。

Q3－9　高校入学者選抜や進路に向けての指導はどのように行えばよいですか。

A　進学・進路の指導については、生徒の実態に合わせて必要な情報を集めることが重要です。可能な限り、小学校高学年や中学校第１・２学年のうちから情報を集めるとともに、各学校の入学説明会などに当該生徒や保護者に参加してもらうようにすることが大切です。

進路に関わる懇談会等を行うときは、日本の学校制度や北海道の入学者選抜のしくみ等について事前に保護者に伝えます。

通常、進路に関わる懇談会等は中学校第２・３学年を対象に行われることが多いですが、進路に対する見通しや夢をもたせたり、学習に対する動機付けや意欲の向上を図ったりするために、できるだけ早い段階で開催する方法も考えられます。

進路に関わる懇談会で伝えたいこと、聞いておきたいこと

保護者に伝えておきたいこと

- □日本の学校制度
- □中学校卒業までのスケジュール
- □高校でかかる費用
- □高校で取得できる資格
- □高校入学選抜の情報
- □入学者選抜における特別な配慮
- □教育委員会やボランティアネットワークなどが開催する「進路ガイダンス」の情報

保護者に伝えておきたいこと

- □今後の計画（中学校卒業後の進路選択）
- □保護者と本人の希望

また、中学校卒業後の進路選択について、保護者と本人それぞれの希望を聞くことで、必要な情報を集めていくことが大切です。教育委員会、ＮＰＯ・ボランティア団体、外国籍の卒業生など、幅広く高校進学や就職などの進路に関する情報を収集します。保護者が子どもに期待する進路と本人の希望する進路が異なる場合もあります。その際に、保護者と本人が十分に話し合い、互いによりよい未来を築けるように、助言します。

さらに、進路指導の一環として、外国人生徒等に対して進路説明会を学校や市町村教育委員会が主催して行うケースもあります。単独の場合や校長会等とタイアップして行う場合もあります。大切なのは、子どもたちが、進路について知る機会を学校や教育委員会が確保することです。

進路支援　〔進路を考える会／豊橋市の事例〕

「進路を考える会」の開催（市教委主催　年１回　平成17年～）
- ・「進路の手引き」作成（ポ語、ス語、英語、タガ語、中国語）
- ・「進路を考える会　資料」PowerPoint（ポ語、ス語、英語、タガ語、中国語）

対象	小学生～中学生、外国人保護者、学校関係者
目標	進路選択に必要な基本的な情報を提供し、具体的な進路イメージを抱かせる。
内容	①進路情報の提供 （日本の学校制度、中学校卒業までのスケジュール、中学校卒業後の進路選択、高校でかかる費用・奨学金、高校で取得できる資格、正規雇用と非正規雇用の違い、高校入試情報等） ②先輩の体験談（進路選択について話す） ③個別相談 （個別ブースでの相談、中学校の国際教室担当者や進路指導主事、高校の担当者からの具体的なアドバイス）

市教委：翻訳資料の作成 → 市教委：進路を考える会 → 学校：進路指導の充実

（参考資料：帰国・外国人児童生徒等教育推進支援事業運営協議会　講義資料
豊橋市教育委員会外国人児童生徒教育相談員　築樋博子氏）

○　**北海道教育委員会のホームページ**
（https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/gks/koukounyuusenn.html）
・道立学校を受検する際の学力検査や入学後の学校生活等について、生徒や保護者が特別な配慮（問題用紙等へのルビ振りなど）を希望する場合の対応や流れ、相談窓口についてリーフレット形式で掲載しています。
・海外からの保護者の転勤などによって、生徒が道立高等学校を受験する場合の手続きなどに係る情報をリーフレット形式で掲載しています。

○　**外国人児童生徒のための就学ガイドブック**
（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1320860.htm）
・英語、韓国・朝鮮語、ヴェトナム語、フィリピノ語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、ウクライナ語の各言語別の就学案内です。概要版もあります。
・日本の教育制度や経済的支援などについても掲載されています。

○　**（財）海外子女教育振興財団**（http://www.joes.or.jp/）
住所：東京都港区愛宕１－３－４　愛宕東洋ビル６Ｆ
電話：03－4330－1341
・1971 年１月、外務省および文部省（当時）の許可を受け発足、海外子女・帰国子女のために各種の教育振興業務を行っています。
・国内帰国子女受け入れ校、帰国生のための学校説明会・相談会、外国語保持教室などの情報を得ることができます。また、海外に転出する際、教科書の支給業務を行っています。

○　**北海道外国人相談センター**（https://www.hiecc.or.jp/soudan/index.html）
・くらしのガイド「教育」のページには、北海道の外国人学校をはじめ、制度や手続きに係る関係機関の URL 等が掲載されています。
・くらしのガイド「仕事（労働・雇用）」のページには、求職相談や手続き・問合せ窓口に係る URL や電話番号等が掲載されています。

○　**ハローワークプラザ札幌**
（https://jsite.mhlw.go.jp/hokkaido-hellowork/list/sapporo/shisetsu/hw-plaza/gaikokujin.html）
住所：札幌市中央区北４条西５丁目　大樹生命札幌共同ビル５Ｆ
電話：011-200-9923
・外国人・留学生支援コーナーが設置されており、求人検索や応募書類の添削、面接練習、個別相談などができます。
・通訳（英語、中国語、韓国語）を利用した相談を行うことも可能です。（要予約）